

---

# 2021年度 地域志向活動報告書

まずは大人が変わる！  
ミライを創る「ゼロから創る力」を子どもに贈る  
保護者向け地域子育て支援

やわたの森KIDS代表三浦雅代

---



# やわたの森KIDS

不確実な時代に豊かな人生を築く「ゼロから創る力」を社会にとどけます


日本の子どもたちの自己肯定感は国際的にも低く、将来に対して強い不安を抱いている傾向が顕著です。AIの台頭、新型コロナウイルス感染症拡大やウクライナ危機が象徴する通り、私たちが生きる世界の不確実性は益々高まり、人々の不安は更に強くなっているように思われます。子どもの将来を案じた大人は、子育てや教育への投資を増加させています。子どもたちの毎日は学校、習い事や塾で埋め尽くされ、子供の遊ぶ姿は街から消えつつあります。

このような状況は、本当に子どもたちが不確実な時代を幸せに生きるための力を育てているのでしょうか。

私たちの、答えは「No」です。今の時代自ら豊かな人生を創られるようにするためには、どのような状況でも自分や周りを幸せにできるモノコトを生み出せるような力「ゼロから創る力」が重要だと考えるようになりました。2020年市川に任意団体「やわたの森Kids」を立上げ、2020年度千葉商科大学様の地域志向活動助成を頂き、各方面の研究や実務経験を基に、この「創る力」を育むプログラム「モリノテ」を完成し、運営しています。

ところが活動を進めていくにつれ、この力を広く社会に根付かせるためには、大人の理解を深めることが不可欠と考えるようになり、2021年度保護者向け普及・支援活動を行いました。

不確実な時代、どのような状況でも自分や周りを幸せにできるモノコトを生み出せるような「ゼロから創る力」が不可欠



**やわたの森Kidsの使命**

どんな状況でも  
自分や周りを幸せにできる  
モノコトを生み出す  
「ゼロから創る力」

この育成を通じて、  
より良い生き方を  
後押しします

# 2022年度活動報告

「ゼロから創る力」を大人にも届けたい

私たちが2021年度地域志向活動助成の枠組みで取り組んだ活動は主に2分野です。

1. 令和の育児実態調査
2. 仮説に基づく処方箋検討

それぞれの活動概要と成果について以下の通りご報告いたします。

## 1. 令和の育児実態調査

「創る力」の社会的な普及に障害になるものは何か？私たちはこれを理解するために、まずは保護者たちの育児や生活の状況を理解するための調査を行いました。主に文献調査、市川市内外での子育て当事者（保護者、子育て支援などの活動に関わるNPO関係者等）へのインタビューを行いました。

結果、見えてきたのは、多くの保護者達が「子育てとはこうあるべき」

「私がきちんと育てなければならぬ」「周りに迷惑をかけてはならぬ」というプレッシャーにさらされながら日々生活をしている実態でした。子どもが、理想像から外れて失敗しないよう、迷惑かけることのないよう細心の注意を払い過介入傾向に陥っている



保護者。不安・心配から、子育てや教育への投資を必要以上に増やす保護者。いずれも、私たちがやわたの森Kidsを立ち上げた時に持っていた問題意識である、「大人による子どもへの過介入による自律性の阻害」や、「子どもが自由に探究する自由時間の奪取」につながっているのではないかと、という仮説が導き出されました。これは、欧米の研究で明らかになっている「子どもの創造力を育むためには自由に探究する時間が不可欠」という事実とは真逆の方向に進んでおり、私たちは改めてこの問題への危機感を高めました。

## 2. 仮説に基づく処方箋の検討

一方、先の調査では保護者自身が悩み、不安の中で子育てを行っている状況も浮き彫りになりました。そこでやわたの森Kidsは、保護者を支援しつつ、「創る力」を子育てや学びに根付かせていくための条件として、創る力への理解の向上に加え、現在不足している以下の3つの「じ」を取り戻すことが必要だとの仮説を立てました。

① じかん：共働き、核家族化の増加に伴い、仕事、家事、育児に忙しく、大人自体も忙しくなっている。

② じしん：保護者自体の自信・自己肯定感の欠如が、子どもには「こうあるべき」「こうなってほしい」という理想像を投影するように。結果、保護者自身もしくはその委託を受けた大人たち（塾や習い事の大人）による過介入の要因の一つとなっている。

③ じゆう：上記のような「こうあるべき」といった価値観、同調圧力からの自由

そして、①3つの「じ」を取り戻すための保護者向け活動、加えて②「創る力」への理解を深めるための活動の2本柱に取り組みました。

### ①自分軸・自分時間を取り戻す、周りとのつながりと広い視野を持つ

女性は出産を機に、急な環境の変化にさらされ、社会とのつながりが減り自分の名前ではない「〇〇ちゃんママ」という新しい立場で社会生活や人との関係が築かれるようになります。子どもとの日々の生活、そして自分では自由に選びづらい人間関係の中、自分喪失状態になる女性も少なくないと言われます。子育て中に自分らしさを追求することに引け目を感じる母親も多いのが事実ですが、先進的な保育の現場では、一定時間子どもと過ごした後は意図的に自分の時間をとりもどすことが健全な保育活動に不可欠とされるようになっていきます。

やわたの森Kidsは、オンラインを活用して、保護者が週末の朝などの隙間時間に自分らしさや自信をとりもどせるような創作、健康・美容活動に取り組めるようなワークショップシリーズ「子育てに効く！ママのじぶん時間」を立上げ試行し、盛況を期しました。参加者からは、その時間をゆっくり過ごせただけでなく、その後も意図的に自分時間を取り、結果子どもに余裕をもって接することができるようになったとの評価を頂きました。

(仮説)創る力を育む子育てのために





また、地域の別団体と協力して、子育て中の母親向けオンラインおしゃべり会を開催しました。子育ての一般的な悩みや、子育てを円滑に進めるために必要な家族との対話や家事分担の推進について気軽に話し合うことができました。会には、子育ての大先輩、困難を克服した経験のある現役の父親なども参加。参加者からは、同じ立場にある保護者と話せただけでなく、多様な参加者もいたため多角的な視点で建設的な対話を行い、具体的なアクションを持って帰れたとの感想を得ました。

この他、AI時代に必要な能力や学びについて考えるドキュメンタリー映画「Most Likely to Succeed」の上映会・座談会の開催（1月）、子育て世代が地域社会とつながり社会課題の解決に貢献するための素地づくりとしての「ソーシャルビジネス勉強会」などを開催（随時）し、横の繋がりづくりに取り組みました。

## ②創る力を育む子育て応援プログラム

前述の通り、子育てに対するプレッシャーや不安はともすると「創る力」を阻害する子育てを助長しかねません。そこで私たちは、保護者の理解向上のため、これまでに小学生向けに行っていた「ゼロから創る力」を育むプログラム「モリノテ」（2021年度地域志向活動助成を通じて開発）を大人向けプログラムとして更新。まん延防止等重点措置等期間の延長を受け手て助



### 初の親子同時プログラム 保護者に贈りたい気持ち

- 「子ども」「個」と向き合えた。(自分の子供時代も想起)
- 創る力=楽しい!大事!「こうやって育むんだ!」
- 子どもの創る力はすごい!自分も創れる!(親子の循環)

成対象期間終了後の3月に開催しました。プログラム構成は子ども向け「モリノテ」と同様、創作をして発想を広げ、やわらかくなった頭で社会課題に取り組み、解決方法についてのアイデアを具体的な創作で表現し発表するというもの。具体的には、全体テーマを理想の学校づくりと設定し、学校の現状について楽しく考える劇を見たり、自分らしさを表現する名札づくり、今の学校についての気持ちを見つめるワーク、理想の学校について話し合う円卓議論、自分の理想の学校を創る個人ワークと創作、全参加者に向けた成果発表会に取り組みました。参加者からは、「学校という重要だが現状変更は難しいと思い込んでいたトピックにつき話し合い、考えを整理したり自ら解決できることもあるということに気づくきっかけとなった」「参加者から出されたアイデアや創作はどれも個性的で素晴らしく、個を尊重することの大切さにあらためて気づいた」「子どもの創る力に感心した」といった、多様な意見の交換、モノコトを創ることの大切さへの気づきを実感したとする感想が多く寄せられました。

# 商大学生さんと築く未来

「ゼロから創る力」を社会に根付かせるソーシャルビジネスとして

昨年度、今年度、やわたの森Kidsは、千葉商科大学様、そしてその学生さんたちの力をお借りしながら、子どもたちが不確実な時代を豊かに生きるためのプログラム作り、そして運営を進めることができました。学生さんたちは、起業家としてのマインド、ノウハウ、あらたな視点を教えてくれ、我々は彼らをボランティアではなく、ボランティア+アントロプレナー（起業家）=ボラントロプレナーズと呼び、相棒として手を組んで進んできました。一人一人が自分らしさを発揮しながら、他メンバーの「個」を尊重、強固なチームワークを展開し、柔軟な発想で企画に取り組み、臨機応変にプログラムを運営。子どもたちの主体性を尊重し、そっと「手を放して目を



やわたの森kidsの相棒  
千葉商科大学の学生さん達



離さず」後押しする。このような姿を見た私たちは、人間が持つ物事を成し遂げるポテンシャルのすばらしさに改めて感動するばかりでした。

2021年5月、私たちの仲間だった鈴木翔太君（当時3年生）が逝去されました。ボラントロプレナーの象徴的存在、優秀でモチベーションも高く、仲間想いの素晴らしい青年の訃報にスタッフ一同長い悲しみの日々を過ごしました。しかしながら、残された仲間は手を取り合い絆を深め、彼は今も私たちと共に「モリノテ」を作り、背中を押してくれています。このかけがえないご縁をくださった商大他皆様に感謝の気持ちをお伝えするとともに、引き続き地域と創る力の普及に邁進したく存じます。本当にありがとうございました。

やわたの森Kids代表 三浦雅代